

イザベラ・バードの視点を活用した 異文化理解についての考察

— 『日本奥地紀行』 の分析を通して —

A Study of Intercultural Understanding from the Perspective of Isabella Bird

— through the Analysis of *Unbeaten Tracks in Japan* —

平野 めぐみ
Megumi HIRANO

Abstract

I read *Unbeaten Tracks in Japan* of the Isabella Bird and I divided her work into two viewpoints and considered it. In Chapter 1 is "Bird as the tourist". I examined the notion of "unbeaten tracks". "Unbeaten tracks" refers to "a place where nobody set foot". It is a place even local people do not know much. She liked such a way and made a trip. There were some reasons for it. There was her desire watch a "true" Japan, which she clams nobody has been. In Chapter 2, I considered the nature of her "womanly" gaze. She intentionally emphasizes her womanliness here and there. I argued that it was necessary for her to emphasize her womanliness because of the times that she lived in.

Key Words : tourist, unbeaten tracks, truth, womanliness

キーワード：旅行者、未開の地、真実、女性らしさ

はじめに

この『日本奥地紀行』の筆者であるイザベラ・バードは1831年に英国ヨークシアで生まれた。1854年、23歳のときに不幸な恋愛から立ち直らせるため、バードは医者から船旅を薦められた。父エドワードから百ポンドを受け取り、彼女は始めて一人でカナダ、アメリカを旅行する。父のこの態度は、当時彼女が属する階級ではめずらしい寛大な態度だった。父エドワードのこの態度は、バードを娘としてではなく、息子として育てた。エドワードはバードに幼い頃から自立心を身につけるよう教育してきたのだった。

息子のように育てられたバードだったが、彼女は脊椎の病を抱えていた。その慢性的な病に

侵されていたが、旅行をすると回復し、自国に戻ると具合が悪くなる状況であったため、彼女はその後「健康のため」という理由のため海外旅行を行った。26歳で再びアメリカへ行き、28歳でスコットランド西海岸やヘブリデーズ諸島、41歳でオーストラリア、ニュージーランド、42歳でハワイ諸島、アメリカ、47歳で日本、香港、48歳でマレー半島、58歳でチベット、ペルシャ、63歳で朝鮮、65歳で中国、70歳でモロッコへの旅行を果たした。彼女は1904年、72歳で亡くなった。

彼女の人生は旅行とともに歩んだ人生だった。旅行ばかりしていたが、彼女は結婚もした。彼女が50歳のときに家のかかりつけの医師だった、ジョン・ビショップ、40歳と結婚した。彼が5年後に病に倒れてしまうので、結婚生活は長くは続かなかったが、結婚には条件があった。世間一般の妻と同じような勤めはできないから、彼女が旅へ出ることを必要とした場合はいつでも旅に出て良いとする条件だった。伴侶の良き理解があったからこそ、彼女の旅行は結婚後も続いたのだった。⁽¹⁾

彼女は旅行をしてくると、それを本にまとめていた。バードの伝記を書いたチェックランドによると、「イザベラは旅の一日の終わりには必ず日記を書いた。それは旅行中の彼女の強さを物語る一例である。たとえその日がどんなに惨憺たる一日でも、どんなに寒くても、暑くても、その日の出来事を記す前には眠らなかった。故国に帰ると、親類や友人たちに宛てた手紙を回収して本にまとめた。「現地」で書かれた日記風の手紙は、臨場感あふれ、趣が豊かであったからである」。⁽²⁾彼女のそのような努力の結晶が、作品となって世に出ているのだ。今回私が扱った作品『日本奥地紀行』は妹や友人に宛てた手紙がベースになっていた。手紙にはバードが日本で見たこと、感じたことを同じ西洋人に伝えていることになるから、日本が西洋人にどう映ったのかが気になるところだ。

本稿では『日本奥地紀行』を通してバードの生き方、思想を考察していく。それと共に異文化理解の視点からの考察を加味していくこととする。『日本奥地紀行』を詳細に分析すると、バードの記述は異文化理解の有用な資料と気づかされるからである。

第1章 旅行者としてのバード

1877年秋、彼女が日本に来日する前年であるが、体を壊してしまう。その記述は、バードの伝記作家によると、次のようなものだ。

一八七七年秋、スコットランドの宣教師デヴィッド・リヴィングストンの業績を記念して、医療伝道学校 (Medical Missionary College) が設立されることになり、イザベラはエディンバラでその支援のための大バザーに没頭していた。しかし多忙な日々にもかかわらず、彼女は精神的に枯渇状態にあり、健康もしだいに悪化していった。医師から転地療養をすすめられると、彼女はどこで何をしようかと考えた。まず思いついたのは、大好きなメキシコ型の鞍に乗ってアンデスを旅することだった。しかしチャールズ・ダーウィンに相談すると彼は

積極的にすすめてくれなかった。そこで西洋人の旅行者がまだ足を踏み入っていない日本の奥地を旅することにした。⁽³⁾

転地療養をすすめられた彼女は、アンデスに行こうとしていたが、チャールズ・ダーウィンに進めてもらえなかった結果日本に行く決意をする。日本を選び、しかも奥地を旅するというには理由があった。

一八七八年は日本が開港して二十年目にあたり、また幕府が崩壊し天皇制が復活して十年目にあたった。東京、横浜、神戸などは少なからず近代化されたにちがいないが、近代化の波に洗われていない地域がどこかに残っているはずである、イザベラはそういう地域を旅してみたいと以前から思っていた。⁽⁴⁾

日本の奥地に足を踏み入れようとした気持ちをバードが以前から持っていたことがわかる。この節では、彼女が“unbeaten tracks”（未開の地）にどうしてそのようにこだわったのか、そしてその“unbeaten tracks”（未開の地）の旅行を通して得た旅行者としての自信について考察していこうと思う。

第1節 “unbeaten tracks”（未開の地）にこだわった理由

そもそも日本に来た理由は、自分の健康を癒すというのが第一の目標だった。はしがきに「日本には新奇な興味をいつまでも感じさせるものが特に多くて、健康になりたいと願う孤独な旅人の心を慰め、身体をいやすのに役立つものがきっとあるだろうと考えたからである」⁽⁵⁾と記されている。だが、その目標のためならば、日本の観光地を満喫する旅でよかったであろう。しかし、あえて彼女は“unbeaten tracks”（未開の地）にこだわった。その理由をここでは探っていきたいと思う。

バードがその日本旅行を通して一貫してきたことは、“unbeaten tracks”（未開の地）の探求だった。彼女は横浜、東京、日光、会津、新潟、山形、新庄、横手、久保田、青森、函館、室蘭と東日本から北海道にかけての旅行をした。今現在でこそ、彼女が行ったどの地方も観光地として有名な地となったが、横浜、東京、日光を除いた場所は、当時は観光地ではない所ばかりだ。

私は横浜、東京、日光を観光地としたが、それには理由がある。それらの土地には外国人が当時足を踏み入れているので、情報も多くあり、有名になり観光地と呼べるような状態になっていた。横浜に、英国代理領事のウィルキンソン、サー・ハリイ・パークス夫妻といった日本をよく知った、バードが頼れる外国人がいる。同様に、東京もそうである。「東京と横浜の間は、汽車で一時間の旅行である」⁽⁶⁾とあるように、馬や徒歩での移動ではなく、電車という交通機関を使って、短時間で移動できる場所でもあり、バードが頼りにした英国大使館の日本書

記官、アーネスト・サトウがそこにはいた。「この人の学識に関する評判は、特に、歴史部門において、日本における最高権威であると日本人自身も言っておるほどである」⁽⁷⁾とあるように、日本を知っている人物が東京にいたのだ。最後に日光についてだが、彼女が東京を出発してからの日記にこのような記述があった。「まだ、「未開の地」には入っていない。それは、日光を出発してから入るつもりである」。⁽⁸⁾ 日光は“unbeaten tracks”（未開の地）ではないと断言している。またこの土地を目指そうとしている時点で、ここはある程度有名な土地だと認識しているのがわかる。「日光から八マイルの今市という村で合流する」⁽⁹⁾にあるように、本国にいる妹への手紙で「日光」を中心に「今市」の説明をするということは前者が有名である証拠だ。以上の理由で、東京、横浜、日光を観光地として扱った。

一般に観光地といえば、きれいな場所で、周辺の道や施設などが整えられた場所がイメージされる。いわばその土地の顔である。特に外国からきた観光客にしてみれば、日本の優れた場所を観光することで、満足を得、帰国後に観光地の印象が日本の印象となって、語られることだろう。だからこそ観光地という場所は人の手が加えられ、きれいに整えられているのだ。そのような観光地に行ってみたいという外国人は普通だろうと思う。

しかし、バードは「普通」ではなかった。例えば、彼女は観光地の1つである横浜について次のように表現している。「横浜は、いくら知ってもますます分らなくなる町だ。ここは活気のない様子をしている。万事が不揃いで、美しさが欠けている。灰色の空、灰色の海、灰色の家並み、灰色の屋根、すべてが一様に単調である」。⁽¹⁰⁾ 当時から港町だったため、活気が溢れていたはずなのに、彼女にとっては何の魅力もない町として映った。そして、同じ手紙の中で次のように述べている。「私はほんとうの日本の姿を見るために出かけたい」。⁽¹¹⁾ この箇所は来日してからすぐの描写だが、もうすでに心は都会を離れて“unbeaten tracks”（未開の地）へのこだわりを見せている。

それから、“unbeaten tracks”（未開の地）にこだわった理由をもう1つあげようと思う。それは、彼女の今までの旅行経験、彼女は来日する前に、略年譜⁽¹²⁾にあるようにアメリカ、カナダ、オーストラリアとすでに多くの国を旅行していた、その経験と今回の日本旅行をした期間にもその理由があるのではないかと思うのだ。

もともと彼女の旅行には、はっきりした期限はない。その旅行では、もちろん先ほど前述した観光地も巡ることだろうと思う。現に、横浜、東京、日光を通っている。彼女のこだわりはきっちりしている。「日光に通ずる街道は二つある。私は宇都宮から行くふつうのコースを避けた」。⁽¹³⁾ 日光に行くにも徹底的に“unbeaten tracks”（未開の地）にこだわり、普通に行けるコースをわざわざ避けている。それはこの旅行には期限がないからこそ、皆が行くようなところではなく、住民しか知らないまたは誰も知らないルートを通る選択をしたくなるのではないかと思う。よりその土地を知りたいと思ったら、作られた産物ではなく、人工的ではない自然な、ありのままの姿に触れたいという意識が生まれると思うのだ。期間が決まっていない長い旅をするならば、そういう心情になると思う。それはバードに限ったことではない。

彼女と同じように外国旅行で似たような経験をした芥川龍之介の旅行記の一部を挙げようと思う。「菜根を囓んでいる花宝玉は、蕩児の玩弄に任すべき美人以上の何物かである。私はこの時支那の女に、初めて女らしい親しみを感じた」。(14) 芥川は上海に取材のために訪れていた。この場面は、現地の人と一緒に来た芸者と芥川が会い、食事をしていたが、飽きたので皆がいた部屋を一人で抜け出し、そこから見えたことを描写したところだ。ここに登場する「花宝玉」は美人である。芥川は「花宝玉」とは以前同席したことがあった。しかし芥川と同席していた時にはなく、彼女が違う部屋で菜根を食べている姿を見て、「女らしい親しみを感じた」と描写しているのである。きれいに着飾り、商売のための行動や態度といった姿の美しさよりも、その彼女が普通に食事をし、しかも気取らずに菜根を食べている姿に惹かれている。彼はその姿を見たからこそ、好感を持つことができたのだ。旅先に来て、作られた美しさを見るよりも、その人のそのもののありのままを見るほうが、旅に来た甲斐があるといわんばかりの描写である。

芥川がきれいに着飾った女性ではなく、菜根を囓んでいる女性の姿に惹かれたように、バードも作られたものではなく、ありのままの様子を見ることに惹かれた。だからこそ、“unbeaten tracks”（未開の地）なのだ。筆者はバードの記述を分析し、“unbeaten tracks”（未開の地）へのこだわりこそ異文化理解するにあたっての貴重な資料と確信した。

第2節 “unbeaten tracks”（未開の地）とは

では、“unbeaten tracks”（未開の地）とはどういうものを考察していきたいと思う。例えば、彼女たちの進んだ道のりの描写から分析してみよう。「昨日の旅行は、今まで経験したうちでもっともきびしいもののひとつであった。十時間も困難な旅を続けたのに、たった十五マイルしか進むことができなかった。(中略)こんなにひどい道路を馬に乗って通るのははじめてであって、それは大変なものである」。(15) 一マイルは約1.6キロ。十時間かけて、24キロ進んだ。すなわち時速2.4キロだ。それくらいしか進めないほど道が悪いのだ。それから、彼女が持っていた地図が役に立たない場面がある。山形市に向かう途中であったが、次のような描写があった。

ブラントンのすぐれた地図にもこの地域は記していない。(中略) この地方の人々は数里先のことは何も知らない。駅通係、次の宿駅の先のことはほとんど説明できない。私が、人のよく通らぬ道筋を進みたいのだ、と言ってたずねると、その返事はきまって、「それはひどい山道だ」とか、「ひどい川をたくさん渡らなければならない」とか、「泊まる場所は百姓家しかない」と言うのである。(16)

彼女はブラントンの地図を頼ってここまで進んできたが、ここは地図に載っていなかった。ブラントンはもともと灯台建設のために来日した人物である。(17) 灯台建設で日本を歩き回って

地図を作ったようなので、人が多く通るような場所ばかりを記した地図だったので。だから、バードは“unbeaten tracks”（未開の地）ではないところはこの地図を頼って、順調に前進むことができた。しかし彼女が「すぐれた地図」と絶賛する地図にも書いていない、まして地元の人までも知らない、足を踏み入れたことがないような場所まで足を踏み入れてしまった。そのような地図にさえない、地元住民でさえ知らない場所こそ、彼女が好んで選んできた“unbeaten tracks”（未開の地）だ。

彼女の描写から見えてきた“unbeaten tracks”（未開の地）とは、道の状態の悪さ、地図にも載らないような土地であるとまとめることができる。次にそのような土地に住む人々を描写した場面を見ながら、“unbeaten tracks”（未開の地）を考察していく。

ここはたいそう貧しいところで、みじめな家屋があり、子どもたちはとても汚く、ひどい皮膚病にかかっていた。女たちは顔色もすぐれず、酷い労働と焚火のひどい煙のために顔もゆがんで全く醜くなっていた。その姿は彫像そのもののように見えた。

私は見たままの真実を書いている。もし私の書いていることが、東海道や中山道、琵琶湖や箱根などについて書く旅行記の記述と違っていても、どちらかが不正確ということにはならない。しかしこれが本当に私にとって新しい日本であり、それについてはどんな本も私に教えてくれなかった。日本はおとぎ話の国ではない。男たちは何も着ていないと言ってもよいだろう。女たちはほとんどが短い下スカートを腰のまわりにしっかり結びつけているか、あるいは青い木綿のズボンをはいている。（中略）着ている着物からは、男か女か分からない。顔も、剃った眉毛とお歯黒がなければ見分けがつかないであろう。短い下スカートは本当に野蛮に見える。女が裸の赤ん坊を抱いたり背負ったりして、外国人をぼかんと眺めながら立っていると、私はとても「文明化した」日本にいるとは思えない。⁽¹⁸⁾

彼女がここで見た人々は、彼女にとって衝撃的だった。彼女が読んできた文献は英語であって、それを書いてきた人はもちろん外国人だったろう。彼らの記録した文献で書いてあった事実とは違っていたことを知り、その衝撃は大きなものだった。

「私は見たままの真実を書いている。」という描写は、その事実がストレートに読者に伝わるように宣言しているものだ。自分の描写に自信を持っていることがうかがえる描写だ。そして「他の旅行記と記述が違って、どちらかが不正確ということにはならない。」と描写することで、他の旅行記をけなすことなく、謙虚に扱ってはいるものの、しかし「これが本当に私にとって新しい日本であり」という表現は、彼女のこだわり続けた“unbeaten tracks”（未開の地）で収穫できたものであり、それを知るために苦労して“unbeaten tracks”（未開の地）を前進してきたことを示唆している。そして、「それについてはどんな本も私に教えてくれなかった。日本はおとぎ話の国ではない。」と続けることで、“unbeaten tracks”（未開の地）を実行した自分の偉大さを誇示しているかのような描写でまとめている。いかにも、今までの本が夢物語で、

真実に目を逸らしてきたかのように思える描写だ。彼女の描写に対する自信、そして彼女の謙虚さと偉大さの誇示を同時に示すことに成功した描写の箇所であるともいえるところだ。

話を戻すが、“unbeaten tracks”（未開の地）はこのような「文明化した」日本にいるとは思えない」と思わせる場所だった。さらに、“unbeaten tracks”（未開の地）はそこの人々の見た目や服装だけでなく、衛生面でも問題がある場所であった。

父親や母親たちは、いっぱい皮膚病にかかっている子、やけど頭の子、たむしの出来ている子を裸のまま抱きかかえており、娘たちはほとんど眼の見えなくなった母親の手をひき、男たちはひどい腫れ物を露出させていた。子どもたちは、虫に刺され、眼炎で半ば閉じている眼をしばたいていた。病気の者も、健康な者も、すべてがむさくるしい着物を着ていた。それも、嘆かわしいほど汚くて、しらみがたかっている。⁽¹⁹⁾

あまりにも見た目がひどいこの状態を見た彼女は、「私の国では絶えず着物を洗濯すること、絶えず皮膚を水で洗って、清潔な布で摩擦すること、これらは同じような皮膚病を治療したり予防したりするときに医者のおすすめの方法である」⁽²⁰⁾ というアドバイスをした。着物を洗濯する、皮膚を洗うという基本的なことで防げるようなことが出来ていないのだ。“unbeaten tracks”（未開の地）は命にも関わるような衛生面も整えられていない地域だった。

第3節 彼女が“unbeaten tracks”（未開の地）を進みながら感じた西洋と日本との違い

彼女は“unbeaten tracks”（未開の地）を進みながら、西洋と日本を区別している描写があった。それらは正に異文化理解である。それらについて述べていこうと思う。

まず、彼女は日本が西洋化することを良く思っていない。まずは人の服装についての指摘だ。「日本人は、西洋の服装をすると、とても小さく見える。どの服も合わない。日本人のみじめな体格、凹んだ胸部、がにまた足という国民的欠陥をいっそうひどくさせるだけである。」⁽²¹⁾ 彼女から見た日本人とは、このようなものだ。確かに日本人は男女とも西洋人よりは小さな体格をしている。その体格を持つ日本人が西洋人と同じような服を着ると、ますます小さく見え、国民的欠陥が出てくると表現した。彼女は、ここではっきりと日本人が洋服を着ることを批判している。要するに好ましく思っていない。日本人は西洋人ではないから着るのにふさわしくないと言わんばかりだ。和服を着る日本人は好きだが、洋服を着る日本人は嫌いなのだ。彼女にとって日本人が洋服を着ているとあからさまに真似をしているのが明らかで、西洋人になりきった感があるから嫌なのだろう。西洋の文化は西洋人のものであって、真似をしてはいけなしいと言いたいのだろう。一方和服姿の日本人は次のように描写されている。「和服を着ているので、ずっと大きく見える。和服はまた、彼らの容姿の欠陥を隠している。」⁽²²⁾ これは、横浜での描写だが、同じようなことを秋田でも述べている。「東京から来たばかりで、まだ三十歳にもならぬ萱橋医師や、職員や学生が、すべて和服で、りっぱな絹織の袴を着用しているのを見て

嬉しかった。和服は美しい。和服をつけると威厳を増すが、洋服をつけると逆に減ずる。」⁽²³⁾ 服装だけでなく、警官の服装、作法にも不満を述べている。山形での描写だが、「警官は、すべて洋服を着ており西洋式の行儀作法をまねしているので、全体として受ける印象はまったくの俗悪趣味である。」⁽²⁴⁾ このように、日本人は和服を身に着けるべきで、洋服を着るものではないと断言し、また作法までもが西洋化することに反対している。

彼女はそれだけでなく、建物にも日本らしさを求めていた。栃木での風景について、「多くの屋根は瓦葺きで、町は、私たちが今まで通過してきた町々よりも、どっしりして美しい姿をしていた。」⁽²⁵⁾ と描写し、日本らしい瓦葺きに関心を抱き、美しいと評価していた。日光でバードが宿泊した先の金谷家についても、「彼は外国人の好みに応じたいとは思いますが、趣味が良いから、自分の美しい家をヨーロッパ風に変えようとはしない。」⁽²⁶⁾ とあり、バードは西洋化しないという金谷の方針を快く思っている。秋田では「外国の影響はほとんど感じられない。この県の役所にも他の仕事にも、外国人は一人もいない。病院でさえも、初めから日本人の医師たちが作ったものである。この事実から、どうしても病院を見たいと思った」⁽²⁷⁾ とあるように、外国の影響を受けていない、日本らしさがつまったものに興味を持っている姿がわかる。

西洋の文化と日本の文化をしっかりと分けておきたいとも考えられるが、それだけでなくわざわざ日本まで来て、まして“unbeaten tracks”（未開の地）まで足を運んだのに偽物の西洋化した日本を見たいとは思わなかったことも原因として考えられるだろう。彼女が「本当の日本を見たい」という描写にもあったように偽物ではなく、日本らしい、飾らないありのままの日本が見たかったからこそその指摘だ。このバードの姿勢こそ異文化を理解する基本ではなかろうか。

第2章 女性としてのバード

彼女の旅行は“unbeaten tracks”（未開の地）という「道なき道」を好んだ旅路であった。このような彼女の旅が楽なものでないことは、今までの分析で度々述べてきた。この旅行を女性一人でこなすのは大変なことだったし、周囲の反応を無視するわけにもいかない状況であった。その状況を振り切るかのように、日記にはバードの女性らしさを表す描写が随所にある。

この章では、彼女の女性らしい描写とはどういうもので、それは何を狙っての描写なのかを異文化理解の視点に留意しつつ考察していきたいと思う。

第1節 女性の視線

バードは旅行先の女性たちを、「女性の視線」で観察していることがわかるように描写をしている。例えば、次のような日光での描写はどうだろうか。

日本の女子はすべて自分の着物を縫ったり作ったりする方法を覚える。しかし私たち英国婦人にとって、縫い物の勉強はむずかしくて分からぬことがあって恐怖の種とされているの

だが、日本の場合にはそれがない。⁽²⁸⁾

生け花の技術は、手引き書によって教えられる。生け花の勉強は女子教育の一部分となっている。私の部屋が新しい花で飾られない日はないほどである。それは私にとって一つの教育となった。飾られている花の孤独の美しさが、私に分かりかけている。床の間には、きわめて美しい掛物がかかっている。桜の花一輪である。襖の羽目板には、一輪のあやめがある。光沢のある柱に優美にかけてある花瓶には、一本の牡丹、一本のあやめ、一本のつつじが、茎や葉や花冠とともにそれぞれ挿してある。(それに較べれば) 私たちの花屋さんの花束ほど奇怪で野蛮なものがあるだろうか。あれは種種の色の花を一束の花輪にまとめたもので、羊歯類でかこみ、レース紙でつつんである。中の花は、茎も葉も花びらさえも、ひどくつぶされている。それぞれの花の優美さも個性も、故意に破壊されている。⁽²⁹⁾

縫い物や生け花に視線を向けるのは、女性らしい視線だと思う。彼女は縫い物を女性が行うものとした上で、日本人女性と西洋人女性とを比較している。彼女が縫い物をした経験があるかどうかははっきりとわからないが、縫い物を通して日本人女性と西洋人女性を比較していることに、彼女の「女性の視線」を読み取ることができる。生け花は、彼女によると日本人女性の教育の一環である。その教育を受けた人が彼女の滞在した家にいたから、毎日新しい花が飾られていた、ということに彼女は気づいた。そして一輪で飾られている花に美しさを感じたこと、西洋の花屋さんの花束と比較をするところは、女性ならではの観察だろう。また、青森では、女性の化粧箱から化粧の様子までを事細かに描写している。

ある既婚の女子が、黒い漆の化粧箱の前に坐っていた。その箱は金泥で咲いた桜の花の一枝をあしらっている。上部に漆の直立材があり、磨かれた金属製の鏡を支えている。化粧箱の引き出しはいくつか開いていて、小さな漆の箱に入れた化粧の必要品が床の上に転がっている。女髪結いとその婦人の後ろに立って、櫛で梳いたり、分けたり、髪を結んだりしている。(中略) その婦人は白粉の箱を取り出し、顔や耳、頸に塗りたくり、彼女の皮膚は仮面をつけているように見えた。それから彼女は駱駝の毛でつくった刷毛で頬に少し水薬を塗り、きれいな眼がいっそうきれいに見えるようにした。(中略) 次に彼女は下唇の上に紅をべったりつけた。その効果は決して見て気持ちよいとはいえないが、女はそう思っていないとみえて、髪をいろいろ鏡に向けて全体の効果をたしかめ、満足げに、にっこりした。その後の化粧は、全部で三時間もかかったが、一人でやっていた。彼女がまた姿を現したとき、無表情な木製の人形が盛装してきわめて上品に、しずしずと出てきたように見えた。これは日本女性の服装の特色をそのまま表わしている。⁽³⁰⁾

バードは少なくとも3時間以上、女性の化粧をしている姿を観察していたことがわかる。彼

女の興味の度合いをうかがうことができるが、化粧箱の模様にはじまって、女性の髪結いから化粧が終わるまですべてを見ていた。何時間もかけて女性の化粧を見ることができるといふ忍耐力は女性ならではのものであるし、化粧箱、髪結い、化粧という女性がこなす工程に眼を向けているのは女性らしい視点である。

このような彼女の「女性の視線」は、表面上は純粹に女性らしい観察を支えているように見えるが、それだけではないように感じた。女性だからという自然な感情での描写ではなく、何らかの意図的な演出または調整を図っているかのように感じるのだ。その理由を探っていこうと思う。

第2節 当時の女性像

その調整を図る必要があった理由として考えられるのは、バードが日本にやってきた19世紀当時のイギリスにあった「理想の女性像」の問題である。彼女が生きてきたこの時代の「理想の女性像」と彼女との関係は切り離すことはできない。当時あった「理想の女性像」とは「家庭の天使」だった。すなわち女性は家にいるもので、夫の良き妻となり、子どもの良き母になるという「良妻賢母」の女性が理想的だったのだ。この理想像について、川本は次のように述べている。

良妻賢母の理想像の背後には、言うまでもなく、男には公領域（＝職場）、女は私領域（＝家庭）という性別分業がある。工業化の進展が家庭と職場の完全な分離をもたらしたなかで、男には生活の糧を得るために家の外で経済活動に従事することが、女には良き妻、賢い母として家庭を安らぎの場とすることが、それぞれ期待されていたのだ。つまり、家庭は激的な生存競争の場たる職場からの避難所、安らぎと憩いの聖域として位置づけられ、女はそこで生存競争の闘いに傷ついて戻る男を迎え、その傷を癒し、男の魂を清める天使の役割を割りふられていたのである。ということは、男性領域たる職場と女性の家庭が相携えて産業資本に基づく社会の歯車を円滑に回転させていたということであろう。〈家庭の天使〉とは、端的に言って、イギリス産業資本がその支配権確立の一環として制度化した「理想の女性」にほかならないのである。⁽³¹⁾

この時代、男性は外で働き、女性は家庭を守るという役割分担があった。天使のように安らぎを与えられるような女性でなければ、理想の女性とは認めてもらえなかった。当時、「理想の女性像」である「家庭の天使」を育成しようとした実用書も存在していたようである。⁽³²⁾ 実用書が世に浸透すれば、多くの読者は「理想の女性像」に憧れを抱くだろう。つまり実用書の存在は、女性が「家庭の天使」となる必要性を多くの人に認識させる。バードがいたイギリスではそのような慣習があった。

バードはこの「理想の女性像」とかけ離れた、たくましさ溢れる“unbeaten tracks”（未開の

地)を求めた旅行を行った。多くの人が女性に対して持つ「家庭の天使」の理想像が蔓延していた時代にも関わらず、バードは家庭に入ることなく外国旅行をした。そのような外国旅行は、女性らしさを捨てるような行為だという認識が周囲から持たれたようだ。バックによると当時においては、女性旅行者の旅行とは、外国へ渡るということだけではなくて、社会的に規定された女性らしさを超えることになってしまうことであったようだ。⁽³³⁾つまり当時の女性旅行者を見る周囲の見方は、女性の慣習や伝統で固められた「家庭の天使」から逃れた人々とみなすというものだった。

バードは「家庭の天使」というしがらみから自由を求めたかったのだろう。彼女は病を抱えていた。自分の国イギリスに帰ると病気は悪化し、旅行をすると治っていた。バックは、外国旅行は抑圧的な慣習から女性を解放し、癒す効果があったと述べている。⁽³⁴⁾バードは旅行を重ねるうちにこの癒しの効果を経験していた。バードは周囲から女性らしさがないような行動をしていると思われていても旅行を続けた。しかし彼女は女性であることを忘れなかったし、女性であることを周囲にわからせるための努力をしてきた。自分が好きな旅行をしつつも、旅行と女性であることを両立させようと努力したのだ。それらのことが読者に伝わるように、描写の中で工夫したのだった。その彼女の工夫されたテクニックのおかげで、彼女は旅行をしても、周囲に女性であることを伝えられ、「家庭の天使」から逃れる自由を得たのだ。

このことをバックも述べている。女性というがんじがらめのものからの自由の獲得は容易なことではない。しかし、逆説的にも女性らしさを出そうと自分で努力し、維持することでそれが容易なこととなる。⁽³⁵⁾バードは自分がしたいと思うことを自由にしたかったからこそ、自分が女性であることを強調したのだ。すなわち自分の旅行を正当化するためには、周囲に時代背景にある「家庭の天使」を逸脱した人間だと思わせるのではなく、「家庭の天使」だけが女性ではないという、新たな女性像として周囲から理解を得ようとしたのだろう。このバードの新たな女性像を確立させようしたことに関して、パルストリエリは、バードの人生や作品は女性たちの市民権や自由を大いに拡大させたと述べている。⁽³⁶⁾バードは、女性が旅行をただけで女性らしさを逸脱するとみなす世の中の風潮を止めようとしたわけではないだろうが、結果としては女性の自由獲得に貢献したようだ。

第3節 英国社会に対応するためのバードの戦略

今までにも述べてきたが、バードは描写によって女性らしさを保とうとしてきた。この節では、彼女の女性らしさのアピール、そしてそのための戦略を具体的に示していこうと思う。

彼女が特に自身が女性らしさを保つために努力していると思われる「はしがき」の引用を考察しようと思う。

本書の中には、農民の生活状態を一般に考えられているよりも悲惨に描いているところがあって、読者の中には、そんなに生なましく描かない方がよかったのではないかと思う人が

いるかもしれない。しかし私は、見たことをありのままに書いたものであり、そういうことは、私が作り出したものでもなく、わざわざ探しに出かけたのでもない。私は、真相を伝えるがために述べただけである。農村こそは、日本政府が建設しようとしている新文明の主要な材料とせねばならぬものであり、本書は、その農村の真の姿を描くことになると思うからである。

正確さこそ、私の第一の目標ではあるが、誤りの個所も多かろうと思う。もし私が、細心の注意にもかかわらず誤りを犯したとするならば、日本を深く研究し日本研究の難しさをよく知っている人々から、もっとも深い同情を寄せられることであろうと思う。⁽³⁷⁾

本書が不十分な著作であることは、よく承知しているつもりであるが、あえてここに公刊することにしたのは、いくたの欠陥があるにもかかわらず、一四〇〇マイル以上にわたる陸上の旅行において、私が見たままの日本の姿を描きたいという、誠実な試みとして本書を受けとっていただきたいからである⁵ ⁽³⁸⁾

もともと「はしがき」は、旅が終わってから記述されるものと考えられる。これらの文章が最終段階に書かれた、ということをお頭において考察していこうと思う。

「はしがき」には、この日本旅行において自分が成し遂げたという自信がある気持ちとは裏腹な記述がなされている。誤りの個所がある、不十分である、欠陥があると作品の信用性、信憑性に関わる記述をしている。先ほども述べたが、「はしがき」は旅行を終えてからの描写だ。旅行に対する自信が前面に出過ぎないように、「はしがき」で調整を図っているかのようだ。その調整の必要性について考えてみる。

旅行を終えてから執筆した「はしがき」においてバードは、旅行をした自分とその自分が女性であるということ調整したと思われる。その調整をしなければ、バードの出身地であるイギリスでは女性らしさを逸脱しているという目で見られてしまう。外国旅行をした時点で、女性を逸脱していると判断されるのだから、逸脱していないことを知らせるためには描写によって女性であることを強調するしかなかった。したがって、描写には女性らしさが伝わるような戦略が必要なのだ。

『日本奥地紀行』を読む読者は様々だが、彼女のこの作品は日本旅行について描写しているのだから、日本研究者は読者になりやすいだろう。彼らの多くは、この時代ということも加味すると、男性が多いとバードは予想していただろうと思う。彼らへの配慮、そして彼らに真っ向から否定されないために「はしがき」にこのような謙遜した描写を用い、良い印象を与えたのだろう。本文を読み進める上で、彼女の述べてきたことを認めてもらいやすくする、敵を作らない戦略ではないかと思う。

読者が最初に目にするのは、「はしがき」だろう。その「はしがき」に女性らしい、謙虚さをしたたかに示すことで、本文で少々乱暴な女性らしさにかけた描写になっけていても、ある程度

の許しを得ることができる。そのような意図的な演出かつ調整を図ったことが、その当時の時代背景を考慮した彼女の最大限の戦略の結果となった。描写の表現の仕方ひとつで、印象はまったく変わるものなのだ。

第3章 バードを通しての異文化理解

第1節 バードの異文化接触

「ヨーロッパ人は、日本について、まともに考えたことさえなかったのである。」「十九世紀も終わりに近くなってヨーロッパはやっとのことに日本を「発見」した。しかし、幸か不幸か、当時のヨーロッパは日本よりはるかに強大であった。ヨーロッパ人は、安心して日本人を含む「東洋人」を見下ろしていることができた。」(p40, 41) バードが来日した頃、ヨーロッパから日本は理解どころか認識もされていなかった。

そのような状況の中、日本に来て“unbeaten tracks”を歩み、奥地の人々の生活に入り込んだ。彼女にとって“unbeaten tracks”は「ほんとうの日本の姿」であった。「ほんとうの日本の姿」での描写は「それについてはどんな本も私に教えてくれなかった。日本はおとぎ話の国ではない」、「文明化した日本にいるとは思えない」と驚愕している様子を表している。その驚愕がよかったのだ。彼女が求めた日本で得られた驚愕は、異文化に來たという実感になった。「東京や大阪は、なるほど驚くべき大都会である。だが、大都会なら、彼らはヨーロッパで、すでにいくつも見ている。どこにも珍しさがない。そのような旅行者は、日本へ行くヨーロッパ人が「必ず発見しなければならないもの」と教えられてきた東洋的ファンタジーを求めてそそくさと京都へ行ってしまう。」(「誤解」p53, 54) この感覚は西洋人ということだけでなく、一般的に旅行者にも備わっているのではないだろうか。大都会にはないその文化特有のものを求める。すなわち異文化との接触、自文化にはないものを旅行者は求めている。自文化と違う感情を得ることは、異文化に触れ、異文化の土地に來たことへの満足度も高まることだろう。

バードの旅行記は、“unbeaten tracks”という異文化が入り込んでいないところのとの接触であった。“unbeaten tracks”にしかない庶民の生活がある。バードはそこに触れることを通して、異文化描写を果たした。多田氏によると「異文化理解においては、生活・生業文化を重視することが効果的と考える」と述べている。“unbeaten tracks”という生活に密着した現場を見て歩き、なおかつそこで生活している人々と同じような生活をしているバードにとって、異文化理解への大きな一歩になったことは確かなことだ。

第2節 バードの描写への配慮

バードは彼女自身も知らなかった日本の姿を発見し描写した。日本人ではない異文化で暮らしている人々は今まで知らなかった描写を読むと良くも悪くも魅力的に写るだろう。そのことに関してエンディミオンは「未知の国について語る時、その国のすべてが、いままでに知っている国とは違うと言い立てて、読者の関心を惹こうとする—それは決して新しい手法ではな

い。」と言っている。知らない国について描写するときに、読者の顔色を思い浮かべながら描写している可能性があることを示唆している。

しかしバードはそのように思われたいために、「私は見たままの真実を書いている」、「それについてはどんな本も私に教えてくれなかった。日本はおとぎ話の国ではない」という言葉を並べることで疑われないよう、彼女は描写に最大限の注意を払っている。彼女の描写への配慮はそれだけではない。女性であることも忘れられぬよう、女性であるということも考慮した描写を随所に出している。彼女はそのような配慮もしっかり行っている。

読者は筆者の異文化描写を通してその文化を眺めることになる。その文化に対して誤解を与えぬためには配慮は必要だ。異文化を描写するときに、自文化との比較を通して見てしまうからだ。バードの場合もそうであった。自文化とは違う状況に関してどんなにひどい状況であっても包み隠さず描写していた。衛生面で問題がある場所については、清潔に保つようとアドバイスをしていたり、西洋の服装をすることに関しては似合わないと言及したりと、意見や批判を述べている。

異文化に触れると、自文化との比較、自文化を基準とする態度をしてしまいがちである。いわゆる自民族（自文化）中心主義である。（グローバル）あらゆる物事を自分の視点と基準で眺める態度である。特に軍事的にも経済的にも優位に立った19世紀のヨーロッパでは、自民族中心主義者が非常に多かった。「ヨーロッパ人が常に自分の側を教師と考え、日本人の側を生徒ないしは模倣者と思いつづけていることである」という描写にもあるように、自民族中心主義の考え方が強く定着している時代であったということがわかる。だからこそ自文化との比較、日本文化への批判、意見を述べているのだろう。

自分が見た日本を描写し、時代背景を考慮し、女性としての役割を果たして異文化を伝える描写に配慮をこらしていた。「はしがき」にはその様子が顕著に表れている。自分の立場をわきまえた描写をするという意図的な演出、調整をすることで、読者へ未知の異文化を伝える、そして時代背景を考慮した女性としてのバードの成功とも言える描写になっている。

まとめ バードが提示した異文化理解への方途の考察

バードの『日本奥地紀行』を通して異文化理解は私たちにどのような方向を示しているのだろうか。“unbeaten tracks”（未開の地）へのこだわりは「ほんとうの日本の姿」を見ることであり、その姿について描写されていた。解説の中で、高橋はバードが序文で述べたことばを引用している。「農村では、人々の生活はほとんど変わっていないので、私は紀行文を少しも書きかえずに、そのまま再び公刊する。本書は日本の奥地の姿を正しく示していると信ずるからである。」1900年に新版を出してからのことばである。彼女の描写は世界中に日本を紹介した。その描写は日本の情報のひとつになったのは確かなことだ。彼女は信じてもらえるよう、誤解を与えぬように描写に気を配っていた。彼女が日本旅行をした時代、日本についてあまりに情報が無い時代であったため、彼女の旅行記が日本に行ったことのない人にとっても、日本を知

る材料になったのは確かだろう。

バードの異文化理解のそのひとつは正確な情報の提供にある。何の関わりもない文化と文化が出会うためには、媒体が必要になる。媒体としての旅行記は、異文化を伝える手段として役立っている。異文化に触れようとするとき実際に外国へ行かなくとも、旅行記だけでなくテレビ番組を見ることでもできる。そう考えると、現代私たちには異文化に触れる機会は非常に多くなっている。異文化の情報を手に入れる手段、方法は多くある。物体の媒体だけでなく、外国人が日本に来たり、日本人が外国に行ったりと人が媒体となって異文化を知る機会が増えている。

人と人が初対面を果たしたときに、コミュニケーションを図りながらお互いを知ろうとするのと同様に、文化と文化が対面するときも、お互いを知るという行動は大切だと考える。バードは日本を知らない状況であり、環境であったが、“unbeaten tracks”（未開の地）に出かけたことで文化を知り、共有し、また旅行記で読者に自分の経験を伝えた。これは、文化と文化がコミュニケーションされた状態だと考える。異文化同士がお互いを知ることから、異文化理解は始まる。バードの異文化理解は人々の基層の文化を知る大切さも示した。

人と人との関係の中でも衝突や誤解が生じる。文化と文化にも衝突や摩擦、そして誤解を生じる。エンディミオンは次のように述べている。「誤解は、一つの文化が他の文化について基本的な認識の体系を持っていない場合に起こる。」(p53) 人間関係同様にコミュニケーション不足、すなわち相手の文化に対しての認識がない場合に起こる。

「異文化」に触れる機会がますます増える今日。そして国際色豊かになっている現代において、異文化理解は大切なことである。文化と文化のコミュニケーションを深めるという意識を持って異文化と様々な手段で接触していくことが今後大切になってくる。バードの示す方向は異文化理解の基本であると思われる。

【注】

- (1) O.チェックランド 『イザベラ・バード 旅の生涯』 川勝貴美訳 1995年
バードの伝記的情報については、チェックランドを参照した。
- (2) O.チェックランド 『イザベラ・バード 旅の生涯』 川勝貴美訳 1995年 v ページ
- (3) O.チェックランド 『イザベラ・バード 旅の生涯』 川勝貴美訳 1995年 85ページ
- (4) O.チェックランド 『イザベラ・バード 旅の生涯』 川勝貴美訳 1995年 85ページ
- (5) イザベラ・バード 『日本奥地紀行』 高梨健吉訳 平凡社 2000年 17ページ

原文は以下の通り

“[I]n an especial degree, those sources of novel and sustained interest which conduce so essentially to the enjoyment and restoration of a solitary health-seeker”.

- (6) イザベラ・バード 『日本奥地紀行』 高梨健吉訳 平凡社 2000年 35ページ

原文は以下の通り

“The journey between the two cities is performed in an hour”.

- (7) イザベラ・バード 『日本奥地紀行』 高梨健吉訳 平凡社 2000年 41ページ

原文は以下の通り

“The Japanese Secretary of Legation is Mr. Ernest Satow, whose reputation for scholarship, especially in the department of history, is said by the Japanese themselves to be the highest in Japan”.

(8) イザベラ・バード 『日本奥地紀行』 高梨健吉訳 平凡社 2000年 67ページ

原文は以下の通り

“[T]hough not upon the “unbeaten tracks” which I hope to take after leaving Nikko”.

(9) イザベラ・バード 『日本奥地紀行』 高梨健吉訳 平凡社 2000年 90ページ

原文は以下の通り

“[I]maichi, eight miles from Nikko, where they unite”.

(10) イザベラ・バード 『日本奥地紀行』 高梨健吉訳 平凡社 2000年 30ページ

原文は以下の通り

“Yokohama does not improve on further acquaintance. It has a dead-alive look. It has irregularity without picturesqueness, and the grey sea, grey houses, and grey roofs, look harmoniously dull”.

(11) イザベラ・バード 『日本奥地紀行』 高梨健吉訳 平凡社 2000年 31ページ

原文は以下の通り

“I long to get away into real Japan”.

(12) 高梨健吉 解説 『日本奥地紀行』 平凡社 2000年 523ページ

(13) イザベラ・バード 『日本奥地紀行』 高梨健吉訳 平凡社 2000年 90ページ

原文は以下の通り

“Two roads lead to Nikko. I avoided the one usually taken by Utsunomiya”.

(14) 芥川龍之介 『上海遊記・江南遊記』 講談社 2001年 58ページ

(15) イザベラ・バード 『日本奥地紀行』 高梨健吉訳 平凡社 2000年 178ページ

原文は以下の通り

“Yesterday’s journey was one of the most severe I have yet had, for in ten hours of hard travelling I only accomplished fifteen miles… It is the very worst road I ever rode over, and that is saying a good deal”.

(16) イザベラ・バード 『日本奥地紀行』 高梨健吉訳 平凡社 2000年 209ページ

原文は以下の通り

“Mr. Brunton’s excellent map fails in this region… the people know nothing beyond the distance of a few ri, and the agents seldom tell one anything beyond the next stage. When I inquire about the ‘unbeaten tracks’ that I wish to take, the answers are, ‘It’s an awful road through mountains,’ or ‘There are many bad rivers to cross,’ or ‘There are none but farmers’ houses to stop at”.

(17) 竹内博 『来日西洋人名事典』 増補改定普及版 日外アソシエーツ 1995年 383ページ

(18) イザベラ・バード 『日本奥地紀行』 高梨健吉訳 平凡社 2000年 140, 141ページ

原文は以下の通り

“[A] very poor place, with poverty-stricken houses, children very dirty and sorely afflicted by skin maladies, and women with complexions and features hardened by severe work and much wood smoke into positive ugliness, and with figures anything but statuesque.

I write the truth as I see it, and if my accounts conflict with those of tourists who write of the Tokaido and Nakasendo, of Lake Biwa and Hakone, it does not follow that either is inaccurate. But truly this is a new Japan to me, of which no books have given me any idea, and it is not fairyland. The men may be said to wear nothing. Few of the women wear anything but a short petticoat wound tightly round them, or blue cotton trousers very tight… From the dress no notion of the sex of the wearer could be gained, nor from the faces, if it were not for the shaven eyebrows and black teeth. The short petticoat is truly barbarous-looking, and when a woman has a nude baby on her

back or in her arms, and stands staring vacantly at the foreigner, I can hardly believe myself in 'civilized' Japan".

(19) イザベラ・バード 『日本奥地紀行』 高梨健吉訳 平凡社 2000年 160ページ

原文は以下の通り

"[F]athers and mothers holding naked children covered with skin-disease, or with scald-head, or ringworm, daughters leading mothers nearly blind, men exhibiting painful sores, children blinking with eyes infested by flies and nearly closed with ophthalmia; and all, sick and well, in truly "vile raiment," lamentably dirty and swarming with vermin".

(20) イザベラ・バード 『日本奥地紀行』 高梨健吉訳 平凡社 2000年 160ページ

原文は以下の通り

"[A]nd that in my own country the constant washing of clothes, and the constant application of water to the skin, accompanied by friction with clean cloths, would be much relied upon by doctors for the cure and prevention of similar cutaneous diseases".

(21) イザベラ・バード 『日本奥地紀行』 高梨健吉訳 平凡社 2000年 37ページ

原文は以下の通り

"The Japanese look most diminutive in European dress. Each garment is a misfit, and exaggerates the miserable physique and the national defects of concave chests and bow legs".

(22) イザベラ・バード 『日本奥地紀行』 高梨健吉訳 平凡社 2000年 38, 39ページ

原文は以下の通り

"[T]hey look far broader in the national costume, which also conceals the defects of their figures".

(23) イザベラ・バード 『日本奥地紀行』 高梨健吉訳 平凡社 2000年 256ページ

原文は以下の通り

"I was delighted to see that Dr. Kayabashi, a man under thirty, and fresh from Tokyo, and all the staff and students were in the national dress, with the hakama of rich silk. It is a beautiful dress, and assists dignity as much as the ill-fitting European costume detracts from it".

(24) イザベラ・バード 『日本奥地紀行』 高梨健吉訳 平凡社 2000年 226ページ

原文は以下の通り

"[A]nd as many policemen, all in European dress, to which they had added an imitation of European manners, the total result being unmitigated vulgarity".

(25) イザベラ・バード 『日本奥地紀行』 高梨健吉訳 平凡社 2000年 86ページ

原文は以下の通り

"Many of the roofs are tiled, and the town has a more solid and handsome appearance than those that we had previously passed through".

(26) イザベラ・バード 『日本奥地紀行』 高梨健吉訳 平凡社 2000年 99ページ

原文は以下の通り

"[H]e is very anxious to meet their views, while his good taste leads him to avoid Europeanising his beautiful home".

(27) イザベラ・バード 『日本奥地紀行』 高梨健吉訳 平凡社 2000年 254ページ

原文は以下の通り

"Foreign influence is hardly at all felt, there is not a single foreigner in Government or any other employment, and even the hospital was organized from the beginning by Japanese doctors. This fact made me greatly desire to see it".

(28) イザベラ・バード 『日本奥地紀行』 高梨健吉訳 平凡社 2000年 123ページ

原文は以下の通り

"All Japanese girls learn to sew and to make their own clothes, but there are none of the mysteries and difficulties which make the sewing lesson a thing of dread with us".

(29) イザベラ・バード 『日本奥地紀行』 高梨健吉訳 平凡社 2000年 125ページ

原文は以下の通り

“The art of arranging flowers is taught in manuals, the study of which forms part of a girl’s education, and there is scarcely a day in which my room is not newly decorated. It is an education to me; I am beginning to appreciate the extreme beauty of solitude in decoration. In the alcove hangs a kakemono of exquisite beauty, a single blossoming branch of the cherry. On one panel of a folding screen there is a single iris. The vases which hang so gracefully on the polished posts contain each a single peony, a single iris, a single azalea, stalk, leaves, and corolla—all displayed in their full beauty. Can anything be more grotesque and barbarous than our ‘florists’ bouquets,’ a series of concentric rings of flowers of diverse colours, bordered by maidenhair and a piece of stiff lace paper, in which stems, leaves, and even petals are brutally crushed, and the grace and individuality of each flower systematically destroyed?”.

(30) イザベラ・バード 『日本奥地紀行』 高梨健吉訳 平凡社 2000年 321～323ページ

原文は以下の通り

“A married girl knelt in front of a black lacquer toilet-box with a spray of cherry blossoms in gold sprawling over it, and lacquer uprights at the top, which supported a polished metal mirror. Several drawers in the toilet-box were open, and toilet requisites in small lacquer boxes were lying on the floor. A female barber stood behind the lady, combing, dividing, and tying her hair… Then the lady herself took a box of white powder, and laid it on her face, ears, and neck, till her skin looked like a mask. With a camel’s-hair brush she then applied some mixture to her eyelids to make the bright eyes look brighter… then a patch of red was placed upon the lower lip. I cannot say that the effect was pleasing, but the girl thought so, for she turned her head so as to see the general effect in the mirror, smiled, and was satisfied. The remainder of her toilet, which altogether took over three hours, was performed in private, and when she reappeared she looked as if a very unmeaning-looking wooden doll had been dressed up with the exquisite good taste, harmony, and quietness which characterize the dress of Japanese women”.

(31) 川本静子 「清く正しく優しく」 54, 55ページ

(32) 川本静子 「清く正しく優しく」 57ページ

(33) Evelyn Bach, “A Traveller in Skirts”, 589.

(34) Evelyn Bach, “A Traveller in Skirts”, 595.

(35) Evelyn Bach, “A Traveller in Skirts”, 590.

(36) Elizabeth Balestrieri, “In the Name of Empire”, 129.

(37) イザベラ・バード 『日本奥地紀行』 高梨健吉訳 平凡社 2000年 19ページ

原文は以下の通り

“Accuracy has been my first aim, but the sources of error are many, and it is from those who have studied Japan the most carefully, and are the best acquainted with its difficulties, that I shall receive the most kindly allowance if, in spite of carefulness, I have fallen into mistakes”.

(38) イザベラ・バード 『日本奥地紀行』 高梨健吉訳 平凡社 2000年 20ページ

原文は以下の通り

“I am painfully conscious of the defects of this volume, but I venture to present it to the public in the hope that, in spite of its demerits, it may be accepted as an honest attempt to describe things as I saw them in Japan, on land journeys of more than 1400 miles”.